様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：43922
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520463
研究課題名（和文）　タマン諸語とカイケ語の記述、および他のヒマラヤ諸語との言語系統、接触に関する研究
研究課題名（英文）Description of Tamangic and Kaike and investigation of their genetic relationship to other Himalayan languages and of their mutual language contact
研究代表者
本田　伊早夫（HONDA ISAO）
名古屋短期大学・英語コミュニケーション学科・教授
研究者番号：10269681

研究成果の概要（和文）：
チベット＝ビルマ語族に属するカイケ語はこれまでほとんど調査されることがなかった言語であるが、本研究ではネパールでの現地調査によりこの言語の記述研究を進展させると共に、言語系統的に最も近いと推測されてきたタマン語群諸語とチベット語との歴史的関係について理解を深めた。また、カイケ語の音調体系について、周辺のヒマラヤ諸語に見られる音調体系と比較対照しながら、その特徴を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
In this project, field research was carried out several times in Nepal to investigate a language called Kaike, a Tibeto-Burman language that has been hitherto little studied. Based on the data collected during the field trips, an outline of the grammar of this language was described. One of the most significant contributions of the project is a description of the tonal system of the language, which is quite unique in its nature and differs in many aspects from those of its neighboring languages. The project also explored a possible link between Kaike, Tamangic, and Tibetan, and, as a result, our knowledge of their historical relation has advanced. At the same time, it was revealed that there are many difficulties and obstacles that we have to overcome in order to establish their genetic relation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：危機・少数言語

１．研究開始当初の背景

タマン語群諸語とカイケ語は、ブータンに分布する East Bodish 諸言語と共に、チベット語と最も近い言語系統関係にあると考えられてきた。また、それらを話す諸民族はかつてチベット高原をその居住地としていたか、あるいは少なくともそこを経由、移動し、ヒマラヤ山脈を越え、現在の居住地であるネパール北中西部に入ってきたと多くの言語学者、文化人類学者が推測している。これらの推測を言語データによりより確かなものとし、タマン語群諸語、カイケ語、チベット語相互の系統関係と言語接触の状況を把握することは、チベット高原、中央ユーラシア大陸の歴史・文化の探究において大変重要な意味合いを持っている。しかしこれまでに記述・研究が進んでいる言語間の比較だけではなかなか相互の関係の解明が進まず、更なる

未記述言語の調査研究が待たれていた。ことにカイケ語はチベット語とタマン語群諸語とを結びつける言語かも知れないと推測されながらも、本研究代表者の予備的調査以外、それ以前には言語調査がほとんど行われていなかった言語である。また一方、これまで未調査、未記述であったブータンの諸言語の研究、調査結果が近年徐々に発表されるようになり、これらの言語との間の系統関係、言語接触の解明も大きく前進する可能性が高まってきた。

２．研究の目的

本研究の主な目的は以下の４点にまとめられる。

(1) ネパール北西部で話されており、言語学的には未だ未記述、未調査の言語であるカイケ語の言語調査を進め、文法書、辞書の公刊に向けての基礎データを作ること。

(2) ネパール北中西部を中心に広く分布するタマン語群諸語、特にその中でも近い将来消滅の危機が懸念され、且つ、未だ満足のいく記述文法書や辞書がないセケ語とタカリ語ユルカソム方言（あるいはユルカソム語）の言語調査を進め、タマン語群内部の言語系統関係の確立と祖語の再構築の為の基礎データを作ること。

(3) 前述 (1)、(2) によって得られたデータ、およびこれまでの先行研究の成果を分析し、カイケ語とタマン語群諸語両者の歴史的関係、及び両者はそれぞれチベット語等の隣接する諸言語と歴史的にどのような関係があったのかという点について解明を進めること。

(4) カイケ語とタマン語群諸語には共に音調が存在することがわかっているが、未記述のカイケ語の音調の記述を進めると共に、カイケ語とタマン語群諸語、両者の音調の性質についての共時的比較を行い、それぞれの音調発生過程についての解明に寄与し、チベット＝ビルマ語族のみならず、一般理論言語学における音調発生過程のメカニズムの類型論に貢献すること。

３．研究の方法

(1) カイケ語の言語記述調査の為、ネパール国内でのフィールド調査を継続的に実施した。調査ではカイケ語の母語話者の協力のもと、語彙収集、文例収集、テキスト収集と、それに伴い音韻、音調、形態、文法など言語構造全般の調査に従事した。各回の現地調査で得たデータは、持ち帰り分析整理し、次回以降の調査で繰り返し確認、仮説を検証するという形で記述を進めて行った。

(2) セケ語、タカリ語などタマン語群諸語の研究については、これまでに本研究代表者が収集したデータと他の研究者によって発表されているデータの整理と分析、及びタマン語群各言語、方言の比較対照作業を優先し、新しいデータの収集を目的としたネパールでの現地調査は見送った。それはまた、ネパールでの現地調査についてはカイケ語の調査に専念し、この言語の記述の進捗を優先したという理由からでもある。

(3) カイケ語、タマン語群諸語以外の言語については、すべて他の研究者による先行研究データに基づき研究と分析を進めた。特にカイケ語、タマン語群諸語とチベット語文語および現代諸方言の比較対照作業（特に語彙の形式とその音調）を通して、相互の系統関係とその他の歴史的関係の探究に従事した。

４．研究成果

(1) カイケ語について、ネパールでの言語記述調査を継続的に実施し、得られたデータの整理と分析を行い、音韻、音調、形態、文法など言語構造全般の記述、語彙とテキストの収集、及びこの言語コミュニティーとその文化に関する情報収集と理解が確実に進展し、文法書、辞書、テキスト集等の刊行に向けて更に準備が整った。

(2) タマン語群諸語の内、セケ語の３方言とタカリ語ユルカソム方言について、これまでに本研究代表者が現地での言語記述調査で収集したデータを整理、分析し、言語構造全般の記述を更に進めた。その成果の一部は「5. 主な発表論文等」の〔雑誌論文〕に記す 1)、2) として刊行された。

(3) タマン語群諸語の語彙について、これまでに本研究代表者が収集したデータと他の研究者によって発表されているデータの整理と分析を行うと共に、チベット語文語及び現代諸方言の語彙との比較対照作業を進め、相互の系統関係とその他の歴史的関係の探究を進展させた。2010 年９月イギリス・ロンドンで開催された国際学会「The 16th Himalayan Languages Symposium」にて、その成果の一部を「Internal diversity in the Tamangic lexicon」として研究発表した。本発表内容はその後論文としてまとめられ、すでに本学会の主催者に提出済みであり、他に選ばれた他の研究発表者のいくつかの論文と共に１冊の書籍としてまとめられ近日中に刊行予定である。この発表では、主に以下の点について論じた。

① タマン語群諸語はお互いかなり近い系統関係にあることは間違いなく、それぞれの言語の基本語彙から多くのタマン祖語語彙が再構築されているが、それでもなお、音調を含めた音韻対応においていくつかの異なる種類の対応が見いだされることを具体的な例を示しながら指摘した。

② これらの異なる音韻対応は、１）共通の祖語（タマン祖語）に由来するもの、２）言

語接触を繰り返してきたと考えられる様々なチベット語方言との異なる時代における言語接触によるもの、３）タマン語群諸語それぞれの内部における歴史的変化によるもの、等に起因すると考えられるが、どの対応がどの原因に起因するものであるのかと言う点について論じた。
③ しかしながら現在の我々の歴史的知識からは、このような分類と選別作業には多くの問題と障害があることを指摘し、タマン語群諸語とチベット語との歴史的関係の探究における今後の進展にあたっての課題と問題点を整理し、提示した。
(4) カイケ語の音調の記述を行うと共に、隣接するタマン語群諸語、チベット語とそれ以外のヒマラヤ地域の諸言語に見られる音調体系との比較対照作業を進展させた。その成果の一部は 2011 年 9 月に神戸市外国語大学で開催された国際学会「The 17th Himalayan Languages Symposium」にて「A preliminary investigation into Kaike tones and a lexical comparison between Kaike, Tamangic, and Tibetan」として発表された。本発表内容は今後、ほぼそのままか、一部改訂して論文としてまとめ、発表の予定である。この発表では、主に以下の点について論じた。
① これまで未記述であったカイケ語の音調に関して、現在までに確定できている単音節語とそれに付く単音節接尾辞に見られる音調パターンについて記述した。そこではまず、カイケ語の音調は、隣接するタマン語群諸語、チベット語とそれ以外のヒマラヤ地域の諸言語に見られる音調と、その音声的現われ方としては共通する点が多いものの、全体の体系としてはかなり異なる点があることを指摘した。特に、１）単音節語幹＋単音節接尾辞のコンビネーションに見られる音調パターンから、単音節語幹、単音節接尾辞共に、それぞれ３種類に分類することができること、２）よって、カイケ語の音調においては、語音調の中で接辞は極めて重要な役割を果たしているのであるが、これは、隣接するタマン語群諸語とチベット語の音調において、接辞部の音調は語幹部の音調に（ほぼ）依存しており、語の音調に関して果たす役割は極めて限定的であるのと著しい対比をなす、という点について指摘し、論じた。
②カイケ語の中でチベット語からの比較的新しい借用と思われる語彙の音韻・音調と現代チベット語中央方言におけるドナー語彙の音韻・音調には一定の対応関係が見いだされることを示した。このように、これまで系統的に比較的近いのではないかと漠然と考えられてきたタマン諸語やチベット語との系統、歴史的関係について更なる探究をしていく上で、相互の借用関係に基づく類似を抽出していく必要性とその方法を明らかにした。
③ カイケ語の音調がどのように発生したのかという点についてはまだ解明できていないが、その特徴からして、チベット語やタマン諸語と共通した音調発生過程を経てできたものではなく、個別に発展させてできたものである可能性が高いことを指摘した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
1) 本田伊早夫「セケ語の節と文」澤田英夫（編）『チベット＝ビルマ系言語の文法現象２：文の特徴付けと下位分類』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所：東京（査読無）（2012. 7 月発行予定）
2) 本田伊早夫「セケ語の格標識について」澤田英夫（編）『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 １：格とその周辺』pp. 109-125. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2010.3.（査読無）
3) Honda, Isao. “Some notes on ‘gold’ and ‘road’ in Zhangzhung and Tamangic.” In: Yasuhiko Nagano (ed.), *Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics (Senri Ethnological Studies 75)*, 99-117. Osaka 大阪: National Museum of Ethnology 国立民族学博物館. 2009.9. （査読無）

〔学会発表〕（計２件）
1. Honda, Isao. “A preliminary investigation into Kaike tones and a lexical comparison between Kaike, Tamangic, and Tibetan.” The 17th Himalayan Languages Symposium. 2011. 9.06. 神戸市外国語大学, 神戸.
2. Honda, Isao. “Internal diversity in the Tamangic lexicon.” The 16th Himalayan Languages Symposium. 2010. 9.04. University of London, London, U.K.

６．研究組織
(1)研究代表者

本田　伊早夫（HONDA ISAO）
名古屋短期大学・英語コミュニケーション学科・教授
研究者番号：10269681

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：